百年歌の研究 ―陸機・百年歌・敦煌本百歳篇を讀む―

栃尾　武

序説

人の一生を詩に詠じたものに晉の陸機の作といわれる「百年歌」がある。今知られている作としては最も古いものに屬するが、民間ではかなり古くからこの種のものが作られていたと考えられる。『論語』爲政篇にはかの有名な「子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」が見える。なぜ七十で終っているかというと、致仕（仕事を人に譲る）の年齢であるからである。七十にして現役引退とは現今の一般社會では珍しいが、漢の頃に成立した『禮記』曲禮上においては人生百年について明確に規定している。人は百年は生きられると考えられていたのである。ただ唐の杜甫は「曲江詩」において「人生七十古來稀」と言い、七十を古稀という語を生んだが、今としては「七十は稀ではないのである。『禮記』を引いておこう、「人生十年曰幼學、二十曰弱冠、三十曰壯有室、四十曰強而仕、五十曰艾服官政、六十曰耆指使、七十曰老而傳、八十、九十曰耄、七年曰悼、悼與耄、雖有罪不加刑焉、百年曰期頤、大夫七十而致事、若不得謝則必賜之几杖」と。後漢の鄭玄の注によると、『禮記』の内則篇を引いて、十歳になると、家を出て外の教師に就き、讀み書き計算を學ぶという。「幼と曰ふ、學ぶ」という句讀の方法を始めたのは朱子である。二十歳を弱といい、冠をつけて成人する。唐の陸德明の音義に「冠、古亂反

（kə-lɨŋm-kuŋm）[注1]と反切を示したのは平聲のクワンガ「かんむり」の意であるのに對して去聲のクワンガ「かんむりをつける＝男子の成人」を意味するので、これを區別する意圖があったのであろう。和音が同じ「クワン」であっても中國語では四聲により意味の區別がなされているのである。「三十歲を壯と曰ふ室有り。」とは鄭玄は「室有り、妻有るなり。妻を室と稱す」と注す。四十歲を強と曰い、仕官する。五十歲になると艾と曰い、重い官職政務に就く。艾はよもぎを言い、髮の色つやを失った老人をいう。艾は七十歲とする説もある。鄭玄は「艾は老なり」と注す。陸德明は「艾、五蓋反（ŋɑ-kɑ-ɦɑi）、一音刈（ŋɨɑi）、治也」とする。反切とは一字の漢字音を二字の漢字を用いて示す方法である。漢字は子音（聲母）と母音（韻母）によって構成されているが、反切は初めの漢字の子音に後の漢字の母音を接續したもので、國際音聲字母によって示したものに傍線を施したのがこれである。漢字の音を表記するのに同音の漢字でもって示すことがある。「一音刈」とするのがこれである。「治」とは「官政に服す」の意を示したものである。内則篇によると「五十にして始めて衰ふ」と言い、初老たる由緣を述べる。六十歲を耆といい、人々を指揮使用することをいう。鄭玄は「事を指し人を使ふなり。六十我（戰爭）に服するに與らず、學に親まず。」と注す。陸德明は「耆、渠夷反（gɨə-ɣi-ɦɑi）。至也、至老境也。與音預」と注す。内則篇には「六十は肉に非ざれば飽かず」と言い、肉でないと食ってもうまくないという。日本人はどうであろうか。七十歲を老と曰い、地位を人に讓る。鄭玄は「家事を傳へ（授、禪＝ゆづる）、子孫に任ずる（委＝ゆだねる）なり。是を宗子（あととり）の父と謂ふ」と注す。陸德明は、「傳、直專反（ɖiɛn-tɕiuen-ɖiuen）、又直戀反（ɖiɛn-tɕiuen-ɖiuen）」と注す。この語は平聲先韻と去聲霰韻と二韻があるが、前者はゆずる意等であり、後者は宿つぎのの車馬、はたごや等の意

となり、區別される。内則篇に「七十、帛に非ざれば煖らず」と言う。八十、九十歳を耄という。鄭玄は「耄、惛忘也。春秋（昭公元年夏四月）左氏傳曰、（諺所）謂老將知（而）耄又放之（者）」と注す。『左傳』の諺は年老いて知見も深まろうとするのに惛忘（心くらみ物忘れすること）がやってくることをいう。陸德明は「耄、莫報反（mo-pau-mau）。惛、音昏。忘、巫放反（mu-pang-muang）又如字。知、音智」と注す。内則に「八十、非人不煖、九十雖得人不煖矣」と言う。耄は七十歳、八十歳、九十歳等諸説がある。生れて七年を悼と曰う。鄭玄は「悼、憐愛也」と注す。陸德明は「悼、徒報反（do-pau-dau）」と注す。「悼と耄とは罪有りと雖も刑を加へず」に對して鄭玄は「愛幼而尊老」と注す。生れて七年までの子供と耄の者は罪を犯しても刑を加えないのは幼兒をいとおしみ、老人を尊敬するからだという。「百歳を期と曰い、頤う。鄭玄は「期、猶要也。頤、養也。（不知）衣服食味。孝子安燕養道而已」と注す。元の陳澔の『禮記集説』に「人壽以百年爲期、故曰期」と注す。同じく「飲食居處動作、無不待於養、故曰頤」と注す。「養道（道）」はやしないみちびく意。百歳の老人は行住坐臥すべてにおいて人の養道を待たねばならぬというのである。「大夫は七十歳にて事を致すとは七十についての項とも聯動するが、鄭玄は「致其所掌之事於君、而告老」と注す。『集説』に「致還其職事於君也」と注す。「もし辭職を許されない時には天子は几杖を與え役目をはたしに出かける時には婦人を伴い、四方の地に使する時には安坐のできる車に乘り、自らは老夫と稱する云々と。

人生百年についての見解は時代や文獻によって出入りがあるが、右に引いた『禮記』の説は後世に多大の影響を與えている。次に後世の百年歌ないし百歳篇の背景を探ってみたい。その資料となる文獻は既に紹介されたものもあるが、それらから微かではあるが、その息吹を感じと

てみたい。

一　百年歌の背景

晉の陸機（AD二六一～三〇三）の「百年歌」はその眞偽はともかく、今のところ最も古い作といえる。この「百年歌」に言及したものに陳の釋智匠の『古今樂録』がある。佚書であるが『初學記』十五歌に「古今樂録（中略）百年歌 晉王道中、陸機並作」とある。陸機の他に王道中の作があるというが、その存在を知らない。唐の吳兢（六七〇～七四九）の『樂府古題要解』[注5]下に「百年詩、存起『孩角』至『百年』、歷述其幼小、丁壯、耆耄之狀、十歲爲一首、陸士衡至百二十時也」と。「總角」とは元服前の小兒をいうので、十歲前後である。陸士衡は陸機の字であるので、「百年歌」を指したものであろう。同じことは唐の王叡（八三一前后在世）の『炙轂子雜録』[注6]にも述べられている。宋の鄭樵（一一〇四～一一六二）の『通志』[注7]四十九、樂略に「百年歌 陸機作十年爲一章、共十章、言句泛濫無可采」と述べている。この評はおそらく男女のいずれを歌ったものか明確でない所や解釋に苦しむところがあり、このように述べられたものであろう。「泛濫」とはひろくあふれることをいうが、まとまりのない語句を指しているのであろう。次に陸機の「百年歌」[注8]に略解を加える。

百年歌　　陸機

一十時　　十歲の時

顏如蘂華暉有暉[注9]　　顏はむくげのように光りかがやいている（◎印 上平五微韻）

體如飄風行如飛　　體ははやてのようにすばやく飛ぶように歩く

孌彼孺子 追隨
終朝出遊 薄暮歸
心無違
清酒漿炙奈樂何
清酒漿炙奈樂何

（注解）底本の新立權撰『陸士衡詩注』の注を参考にしながら注解を試みる。

○舜華『毛詩』四、鄭風「有女同車」「顏如舜華」（傳）舜、木槿也。（中略）有女同行、顏如舜英。（傳）英猶華也。（『古注十三經』四〇〇）第一句・二句男子について歌っていると考える。『毛詩』では女子である。十代の美少年と考える。○孌 女の若くみめよいさま。『毛詩』二、邶風「泉水」「孌彼諸姬（傳）孌、好貌」（二四〇）。○六情 喜・怒・哀・樂・好・惡の六つの情。○逸豫 遊び樂しむ意。逸樂と同じ。○漿炙 こんずにつけて燒いた肉。『周禮』五、天官、酒正「辨三酒之物（中略）三曰清酒（鄭注）清酒、祭祀之酒（中略）辨四飲之物（中略）三曰漿（鄭注）漿、今之戲漿也」（五九〇）漿は酒の一種でこんずをいう。戲は酢漿と注される。こんずは粟米を釀して作る酒でやや酢いとされる。清酒も漿炙もぜいたくなものと考えられる。清酒以下の繰り返しはやし歌の特徴を示している。

みめうるわしい乙女が後を追いしたがう（上平四支韻）
ひねもす出歩きたそがれに歸ってくる
思いのままに遊び樂しみ心に迷いなし
清酒燒肉の樂しみもこれに比べりゃ何ほどもなし
清酒燒肉の樂しみもこれに比べりゃ何ほどもなし

二十、時

膚體彩澤人理成
美目淑貌灼有榮
被服冠帶麗且清
光車駿馬遊都城

二十歳の時

皮膚に色つやあり心に理性成る（○印下平八庚韻）
美しい目もとしとやかなすがた榮有り
衣裳冠帶麗しくかつすがすがし
輝く車駿馬にて都に遊ぶ

高談雅步何盈盈。
清酒漿炙奈樂何
清酒漿炙奈樂何

高尚な話みやびな歩み　何と思いのままよ
清酒焼肉の楽しみもこれに比べりゃ何ほどもなし
清酒焼肉の楽しみもこれに比べりゃ何ほどもなし

〔注解〕

○人理　人の理性。權注引「臣思（揚雄とするは誤り）『蜀都賦』「（經神怪、（緯人理」（和刻本『臣注文選』四41a）これは人の意。二十歳になって人が完成するのは無理。理性ができる意であろう。『荘子』漁父三二「其用於人理也、事親則慈孝、事君則忠貞、飲酒則歡樂」の人理はこれに近い。あるいは人生の道筋の意か。陸機は樂府「塘上行」に「天道有遷易、人理無常全」（和刻本『臣注文選』三22b）と人理を天道と對照させている。○冠帶　士大夫の子弟二十歳になると冠をつけ帶を結んで正装する。○盈盈　二十歳の男子が高談雅歩して思いのままにふるまうこと。權注「古詩」「盈盈樓上女」を引くが、この盈盈は女の容貌のしなやかで美しいさまを言うのである。『國語』楚語下「夫盈而不偪（韋氏注）盈、志滿也」（學術名著巻十八27）

三十　時

行成名立有余聞。
力可扛鼎志干雲。
飲如漏巵氣如熏。
鄰家觀國綜典文。
高冠素帶煥紛紛。
清酒漿炙奈樂何。
清酒漿炙奈樂何

三十歳の時
功成り名聲上り評判よし（○印上平十二文韻）
力は鼎を持ち上げ志は雲をしのぐ高さ
食欲は底なしの盃のごと旺盛氣力は燃えるごと激し
家を出て國の將來を見儒學を修得し
立派な冠とぬり絹の大帶が輝きひるがえる
清酒焼肉の楽しみもこれに比べりゃ何ほどもなし
清酒焼肉の楽しみもこれに比べりゃ何ほどもなし

〔注解〕

○行成呑立　權注引『論語』爲政篇「子曰、吾十有五而志於學、三十而立」。○令聞　權注引『孟子』告子篇「令聞廣譽施於身」。朱注「令、善也、聞、亦譽也」善い評判。○力可扛鼎　權注引『漢書』項籍傳「力扛鼎」顏師古注、扛、舉也」。○干雲　權注引何晏「景福殿賦」「飛閣干雲」（和刻本文選五七b）。青雲之志」を言う。○漏巵　權注引曹植「與吳季重書」「飲若填巨鰲、飲若灌漏巵」「銑曰、巵、酒盃也。言飲酒速盡。加灌漏盃酒不停於盃中」（和刻文選四二28a）。

四十時　四十歲の時

體力克壯志方剛　體力いや盛んに志まさに壯ん（○印下平七陽韻）

跨州越郡還帝鄉　州郡を巡り功成り都に還る

出入承明擁大璫　承明廬に出入し玉冠をまとう

清酒燒炙奈樂何　清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし

清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし

〔注解〕

○克壯　つよく盛ん。潘岳「馬汧督誄」「稜威可厲、儒夫克壯（善）曰子孟子曰、聞伯夷之風者、懦夫有立志。毛詩曰、克壯其猶（中略）（銑）曰（中略）言以威稜勸之、弱夫皆能壯也」（和刻文選五七b）。稜威　威光。懦夫　節義の缺けた男）。○承明　承明廬のこと、石渠閣外にあって侍從の宿直所。○大璫　璫は侍從の冠の前につけた金玉の飾り。

五十時　五十歲の時

何旄仗節鎭邦家。　天子信任の仗をつき、諸國（使）國の安全を保つ（○印下平六麻韻）

鼓鐘嘈囋趙女歌
羅衣綽綽金翠華
言笑雅舞相經過
清酒漿炙奈樂何

鼓鐘かまびすし趙女の歌（○印下平五歌韻）
絹ずれの音に金緑の首飾りが揺れる
談笑しみやびに舞いながら通り過ぎる
清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし
清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし

〔注解〕

○蓬仗節　天子の使臣または武將が信任のしるしとして持つ羽毛で飾った節。『蒙求』「蘇武持節」（『漢書』蘇武列傳）。○趙女　趙の國の女、鼓琴音曲を得意とした。（權注引揚惲「報孫會宗書」「家本秦也能爲秦聲翰日謂作樂也秦聲擊缶也）婦趙女也雅善鼓琴（五臣本作琴）」（和刻本文選注文選四十一37ウ）。○綽綽衣のすれあう音。

六十の時

年亦耆艾業亦隆
驂駕四牡入紫宮
軒冕紛那翠雲中
子孫昌盛家道豐
清酒漿炙奈樂何
清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし

六十歳の時

年もまた老境功業もまた成る（○印上平一東韻）
天子の牡の四頭立ての馬車に添乘し宮中に入る
大夫の車と冠はみどりの雲に映えてきらびやか
子孫繁盛　暮し向きも豊か
清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし
清酒燒肉の樂しみも（これに比べりゃ）何ほどもなし

〔注解〕

○耆艾　老境をいう。耆は六十、艾は五十。『禮記』曲禮上「五十曰艾服官政」（鄭注艾老也）六十曰耆指使

（鄭注 指事皮人也、六十不與服戎、不親學。者（中略）至也、至老境也）」（『古法十三經』巻（一3a）。
驂駕 天子の横に添え乗りする。○四牡 四頭立ての牡馬の引く車。權注引『詩』小雅、鹿鳴、采薇「駕彼四牡、四牡騤騤（毛傳 騤騤彊也）」（『古法十三經』巻九8b）。○紫宮 宮廷をいう。○軒冕 大夫の乗る車と冠。
軒は車ののり。冕は大夫以上の人の冠。權注引揚雄「羽獵賦」「鴻生鉅儒、軒冕雜衣裳（善曰、音昭曰、車有轓曰軒也。冕者大冠也）」。○納那 權注 阿那と同意とす。盛んできらびやかなさま。

七十、時
精爽頗順脩力衰。
清水明鏡不欲觀。
臨樂對酒轉無歡。
攬形羞髮獨長歎。

七十歳の時
たましいはいささか天命に従い安定し體力はなえる（○印下平一先韻）
清んだ水や陰りない鏡に映る衰えた姿を見たくない（○印上平十四寒韻）
宴樂に臨み酒に對しても何とはなく喜べない
ほほをつまみ皮膚の衰えを感じ髪の薄さを恥じひとりため息

〔注解〕
○精爽 たましい。『三國志』十四、蔣濟傳「歡娛之恥、害于精爽」（標點本 449②）。○順 權注引『論語』為政篇「六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」（省略 何晏注）。○脩力衰 權注引『尚書』周書泰誓「番番良士、旅力既愆」（孔傳、勇武番番之良士、雖衆力已過老、我今庶幾欲有此人而用之。番、音波）（『古法十三經』十三4b）旅と脩とは通用字。脩力は背骨の力。○清水明鏡 權注引『漢書』韓安國傳「清水明鏡不可以形逃」（師古曰、言美惡皆見）（標點本 2403⑧）

八十、時
明己損目聰去耳。
前言往行不復紀。

八十歳の時
視力すでに失い目しいてしまった（○印上聲四紙韻）
昔言ったことをもとんと憶えず

辭官致祿歸桑梓。
安居駟馬入舊里。
樂事告終憂事始

職を辭し俸祿を返上し故郷へ歸る
ゆったり身を休め四頭立て馬車でお國入り
事を樂しみ人生の終りを告げ死の憂いが始まる

〔注解〕

○前言往行　昔の聖賢の言行とするのが一般であるが、本人の昔の言行も耄碌して忘れてしまった意とする。權注は前者を採り『易經』大畜を引く。前言往行を記憶し德を畜えることは士大夫の必須の敎養。○辭官致祿　致仕（辭職）をいう。『禮記』曲禮上では七十歲で致事（致仕の意）とす。○桑梓　昔くわとあずさを植えて子孫に遺し、生計を助けた、子孫はこれをもって父母を恭敬（敬老）した。後漢以後は鄕里の意とす。

九十時

日告耽瘁月告衰。
形體雖是志意非。
言多謬誤心多悲。
子孫朝拜或閑誰。
指景玩日慮安危。
感念平生涕交揮。

九十歲の時

日に日に病の重きを告げ月を重ねて身の衰えを告ぐ（○印上平四支韻）
姿體はほどほど意志はぼろぼろ　（○印上平五微韻）
言葉に誤謬多く心には悲しみつのる
子孫は朝のあいさつ時には機嫌うかがい
日かげ一日ながめてあそび安危の心配のみ
若き日を思い出だいたい涙をぬぐう

〔注解〕

○耽瘁　病いにふける。耽は樂しみにふけるのではなく、耽憂と同じ用法。○平生　權注引『論語』憲問篇「久要不忘平生之言」。何晏注、孔曰、平生猶少時。

百歳時

盈數已登肌肉單。
四支百節還相患
眼若濁鏡口垂涎
呼噓嚬蹙反側難
茵褥滋味不復安

百歳の時

人生百年満ち肌の肉そげ落つ（上平十四寒韻）
四肢節節もまた患らう（去聲十六諫韻）
目は濁った鏡のよう口からはよだれを垂らす（下平一先韻）
呼吸亂れ寝返りもままならず
寝るも味わうもまた樂しまず

〔注解〕

○盈數　みちた數。百年を言う。○肌肉單　權注引三國魏阮瑀「駕出北郭門行」「骨消肌肉盡體若枯樹皮」（『樂府詩集』六十一　標點本889③）。單は盡きる意。○嚬蹙　眉にしわよせる意であるが、みだると譯してみた。○茵褥　しきもの。

陸機の「百年歌」が後の敦煌本「百歳篇」の淵源となっていることは任二北の『敦煌曲初探』注7に詳述されている。入矢義高の「徵心行路難―定格聯章の歌曲について―」（塚本博士頌壽記念佛教史學論集　一九六一　87～88頁）において作品の體例が述べられている。同氏はまた「敦煌定格聯章曲子補録」（東方學報　京都　一九六四　43頁）にもその體例が述べられている。川口久雄「敦煌本歎百歳詩・九想觀詩と日本文学について」（内野博士還暦記念東洋学論集　一九六四、十二　403～404頁）も上記論文を受けて論ず展開されている。

入矢義高氏がすでに述べられていて、本稿の百年歌の背景にも引用したが陸機は百二十の時まで作っているとするが、現行作は百歳に終っている。後二十歳まで何を詠じたか疑問である。

百年歌曰一時顏如葬華曄有暉體如飄風行如飛蓬
歸交情逸豫心無違清酒將炙奈樂何清酒將炙奈樂何 二十時膚
彩澤人理成美目淑貌灼有榮光車駭馬遊都城高談雅步何盈
盈清酒將炙奈樂何清酒將炙奈樂何 三十時行成名立有令聞力可
扛鼎志干雲食如漏卮氣如熏辭家觀國綜典文清酒將炙奈樂何清
酒將炙奈樂何 四十時體力克壯志方剛跨州越郡還帝鄉出入承明
擁大璫清酒將炙奈樂何清酒將炙奈樂何 五十時荷旄杖節鎮邦
家鼓鐘磬贊趙女歌羅衣綷粲金翠華言笑雅舞相經過清酒

將炙奈樂何清酒將炙奈樂何 六十時年亦耆艾業亦隆騄駕四牡入紫宮軒
晃納那翠雲中子孫昌盛家道豐清酒將炙奈樂何清酒將
炙奈樂何 七十時精爽頗損筋力愆清水明鏡不欲觀臨
無歡攬形脩髮獨長歎 八十時明已損聰去耳前言往行不復紀辭官
致祿歸桑梓安居駟馬入舊里樂事告終憂事始 九十時日告耽瘁
月告衰形體雖是志意非言多謬誤心多悲子孫朝拜或問誰指景玩
日慮安危感念平生淚交揮 百歲畔盈數已暮肌肉單四支百節即還
相患目若燭鑛口垂涎呼吸頓蹙反側難茵褥滋味不復安

三行目 二十時第三句（榮と光の間）欠可

明・陸元大翻宋『陸士衡文集』（四部叢刊）

百年歌十首

一十時顏如葬華曄有暉體如飄風行如飛蓬

彼孺子相追隨終朝出遊暮歸六情逸豫心
無違清酒將炙奈樂何清酒將炙奈樂何
二十時膚體彩澤人理成美目淑貌灼有榮被

服冠帶麗且清光車駭馬遊都城高談雅步何
盈盈清酒將炙奈樂何清酒將炙奈樂何
三十時行成名立有令聞力可扛鼎志干雲食
如漏卮氣如熏辭家觀國綜典文高冠素帶煥
翩紛清酒將炙奈樂何清酒將炙奈樂何
四十時體力克壯志方剛跨州越郡還帝鄉出
入承明擁大璫清酒將炙奈樂何清酒將炙奈
樂何
五十時荷旄伏節鎮邦家鼓鐘嘈囋趙女歌羅
衣綷粲金翠華言笑雅舞相經過清酒將炙奈
樂何清酒將炙奈樂何
六十時年亦耆艾業亦隆騄駕四牡入紫宮軒
晃納那翠雲中子孫昌盛家道豐清酒將炙奈
樂何清酒將炙奈樂何
七十時精爽頗損筋力愆清水明鏡不欲觀臨
樂對酒轉無歡攬形羞髮獨長歎
八十時明已損目聰去耳前言往行不復紀辭

官致祿歸桑梓安居駟馬入舊里樂事告終憂
事始
九十時日告耽瘁月告衰形體雖是志意非多
言謬誤心多悲子孫朝拜或問誰指景玩日慮
安危感念平生淚交揮

百歳時盈數已登肌肉單四支百節還相患目若濁鏡口乖涎呼吸嚬蹙反側難茵褥滋味不復安

唐呉兢（六五〇～七四九年）『樂府古題要解』『李澤討原本

百年詩

右起總角至百年歴述其幼小丁壯耆耋之狀十歳爲一首陸士衡至百二十時也

二　敦煌本「百歳篇」を讀む

敦煌にかつて存在し、ペリオ及びスタインが將來した詩篇「百歳篇」數篇がある。人の一生を十歳から百歳まで絶句形式十首を一篇とする作品群である。このような形式の詩篇を任二北氏は「定格聯章」と稱した。川口久雄氏は「敦煌本歎百歳詩、九想觀詩と日本文學について」において詳細に論じており、これより先、入矢義高氏が細密に論じている。この「百歳篇」は死人に對する鎮魂を目的にした挽歌であり、廣義の唱導である。梁の慧皎の撰になる『高僧傳』十三「唱導」は唱導について定義づけた最初の書と考えられ、しばしば引用される。「論曰、唱導者、蓋以宣唱法理、開導衆心也。（中略）夫唱導所責其事四焉、謂聲辯才博。非聲則無以警衆、非辯則無以適時。非才則言無可採、非博則語無依據。至若響韻鐘鼓則四衆驚心、聲之爲用也。辭吐俊發、適會無差、辯之爲用也。綺製雕華、交橫逸才之爲用也。商搉經論、採撮書史、博之爲用也。」と。「百歳篇」を廣義の唱導と見たのは經論の唱導に比してやや狹く限定されるからである。唱導の定義づけについては永井義憲氏が詳細に論じており、これに盡きる。なお、『高僧傳』において劉宋、齊各十人の唱導僧の唱導の事蹟が具體的に述べられている。

唱導の四要素は經論を聽衆に高尚な經典と經論を如何に理解させるかである。音曲美聲は衆の好むところであり、「百歳篇」を唱うのに大切である。辯は巧みなことばをつぎつぎ發し、衆の喜怒哀

樂にうまく合わせ氣を引くことである。才は文を美しく飾り巧みなことばを生みだすことである。博とは經論や書物に廣く通じていることにより、衆の尊敬を受け、經論を理解させることにある。唱導は貴顯のみならず大衆にも差別なく行うことを理想とし、心技(體)であることが重要であり、「百歳篇」を唱うにあたり應用されたと考えられる。

次に唐代に「百歳篇」が如何に作られたかその實例を述べる。既に言及されてはいるが、新しく資料を加えておこう。唐蘇鶚撰『杜陽雜編』下に次の文が見える。蘇鶚は唐の昭宗大順初(八九〇年)頃在世している。また雜編下の記事は懿宗咸通十四年(八七三)に終る。

咸通九年、同昌公主出降。(中略)公主始有疾、(中略)雖日加餌、無其驗、而公主薨。上哀痛、自製挽歌詞、令百官繼和。(中略)及靈車過延興門、上與淑妃慟哭、中外聞者無不傷泣。同日葬乳母、上又作祭乳母文。詞理非切、人多傳寫。是後上晨夕惻心掛想、李可及進歌百年曲。聲詞怨感、聽之莫不淚下。又教數千人作數百年隊、取內庫珍寶彫成首飾畫八百足官絁、作畫龍波浪文、以爲地衣、每舞而珠翠滿地。(○出降は降嫁の意。慟哭は激しく悲しみ聲をあげて泣く。○詞理は祭文のことばとすじ。○地衣は地上に敷くしきもの。◎左傍線は人名もしくは人を指す。〜〜は作品名。右傍線は要語を指す。)

右の文とほぼ同内容をもつものが『舊唐書』巻一七七曹確列傳(注11)及び『唐書』巻一八一曹確列傳(注12)に見られる。次に要文を引く。

(『舊唐書』)懿宗以伶官李可及爲威衛將軍。(中略)可及善音律、尤能轉喉爲新聲、音辭曲折、聽者忘倦。京師屠沽效之、呼爲拍彈。同昌公主除喪後、帝與淑妃思念心不已、可及乃爲歎百年舞曲、舞人珠翠盛飾者數百人、畫魚龍坐衣、用官絁五千匹。曲終樂闋、

珠璣覆地。詞語悽惻、聞者涕流。帝故寵之。（○伶官、宮廷の音樂家。○新聲、はやりの歌曲。○曲折、變化に富んでいること。○屠沽、家畜を殺したり酒飯を賣る者、當時賤業者であった。○拍彈、いろいろ身ぶりをして歌い踊る遊戯。○珠翠、珠と翡翠。○悽惻、かなしくねんごろ。）

（『唐書』）時帝溺於德、昵寵優人李可及。可及者、能新聲、自度曲。辭調悽折、京師、媮薄少年爭慕之、號爲拍彈。同昌公主喪畢。帝與郭淑妃悼念不已、可及爲帝造曲曰、數百年、教舞者數百、皆珠翠襚飾。刻畫魚龍地衣、度用繒五千。倚曲作辭、哀思悲怨。聞者皆涕下。舞閣、珠寶覆地。帝以爲天下之至悲、愈寵之。（○昵寵、なれ愛す。○媮薄、軽薄な。○襚飾、盛服の飾り。）

右に引いた『杜陽雜編』及び新、舊唐書の記事は懿宗の息女同昌公主の死に當り宮廷音樂家の李可及という人物が「數百年（舞）曲」を作り歌い舞わせたということであり、記事内容に出入りはあるが、三本共に同根である。雜編の記事が唐代のものであり最も詳細な内容である。唐書はそれぞれ、五代及び宋の成立であるので、雜編ないしは唐代の書に原據が求められる。唱導の書が僧の手になったものであるのに對して、この「數百年曲」が音樂家の手になること、これから紹介する敦煌本「百歳篇」に通じるものと考えられることである。「女人百歳篇」と直接關係あるかどうかは別として興味あることである。ただ右の記事において宮廷の歌舞隊の數千人によって演じられたという事實からこれは唱導とは言えないのではなかろうか。唱導はあくまで僧の手になるものであろう。次に引く記事は宴席において奏歌されているのである。

（『新五代史』五、唐本紀五、莊宗下）存勗（勗）克用長子也。初克用破孟方立于邢州、還軍上黨、置酒三垂岡。伶人奏百年歌、至于衰老之際、聲甚悲。坐上皆悽愴。

とある。ここに見る「百年歌」は川口久雄氏は李可及の「歎百年曲」と考えている。この曲を置酒（酒宴）の餘興に伶人に歌わせ衰老之際に聲甚だ悲しく、坐上の者皆悽愴たる氣分になったというのである。ただ「百歳篇」が敦煌の千佛洞にかつて存在していたことから考えると、僧院において僧侶の手にされたことは間違いない。ここで敦煌本の「百歳篇」を讀むことから始めたい。底本に任半塘の『敦煌歌辭總編』を用い必要に應じてペリオ（P と略稱）とスタイン（S と略稱）の影印本を參照する。S本29は「細門百歳篇」「丈夫百歳篇」「女人百歳篇」が見られる。その他「歎百歳篇（龍上苗）」、「百歳篇 沈上荷」、「百歳篇 一生身」が見られる。この度は底本の配列順に考察したい。

百歳篇 丈夫

甲、斯(S)二九四七、乙、斯(S)五五四九、丙、伯(P)三八二一

[1]
一十香風綻藕花
弟兄如玉父娘誇
平明趁伴爭毬子
直到黄昏不憶家

[2]
二十容顏似玉珪
出門騎馬亂東西
終日不解憂衣食
錦帛看如腳下泥

一十風香しく藕花綻ぶ。
弟兄玉の如く父娘誇る。
平明に趁伴し毬子を爭ひ、
黄昏に直到るも家を憶はず。

二十容顏玉珪に似たり、
門を出づれば騎馬東西に亂る。
終日解さず衣食の憂ひを、
錦帛看ること腳下の泥の如し。

十歳姿香しく蓮の花のよう。藕花 蓮の花。
兄弟玉のよう父母の誇り。
夜明けよりつれ立ちまり遊び、
夕暮れになるも歸るを忘る。

二十歳玉なす美貌、
門を出れば騎馬にて西東。
ひねもす知らず衣食のつらさ、
錦も帛も足下の泥。

[3]
三十堂堂六藝全
縱非親友亦相憐
紫藤花下傾杯處
醉引笙歌美少年

[4]
四十看看欲下坡
近來朋友半消磨
無人解到思量處
祇道春光没有多

[5]
五十强謀幾事成
一身何足料前程
紅顏已向愁中改
白髮那堪鏡裏生

[6]
六十驅驅未肯休
幾時應得暫優遊
兒孫稍似堪分付
不用閒憂且自愁

[7]
七十三更眼不交
只憂閒事未能拋
無端老去令人笑

三十堂堂たり六藝全し、
縱ひ親友に非ずとも相憐ぶ。
紫藤の花下杯を傾く處、
醉ひて笙歌を引ぶる美少年。

四十看る看る坡を下らんと欲す、
近來朋友半ば消磨す。
思量る處に解き到る人無く、
祇に道ふ春光の多く没有きを。

五十强き謀幾事に成り、
一身何ぞ前程を料るに足らん。
紅顏已に愁中に向り改まり、
白髮那ぞ鏡裏に生ずるに堪へん。

六十驅驅して未だ肯て休まず、
幾時か應に暫しの優遊を得べきや。
兒孫稍や分付に堪ふるに似るも、
閒を用ひず憂ひ且つ自ら愁ふ。

七十三更い眼交らず、
只閒事を憂ひ未だ拋つる能はず。
端無くも老ひ去き人をして笑はしむ、

三十歲學業申し分なし、
親友でなくとも愛想よし。
紫藤の花の下杯を傾け、
醉って歌う美少年。

四十歲見る見る下り坂、
このごろ氣心知れた友も半ば死ぬ。
氣心知れた人も無く、
老先長く無きをさとる。

五十歲無理もあまりきかず、
我が未來にもあてにならない。
紅顏愁いごとにやつれ、
白髮鏡を見るにつけてもつらい。

六十歲生活に追われて息う間なく、
子孫にやや仕事をまかせるも、
あいもかわらずとりこし苦勞。
七十歲夜中に眠られず、
だだひまをつぶる苦勞性。
さだめなく老い人の失笑を買い、

・引、聲を長く引いて。
・笙歌、管絃唱歌。
・優遊、ゆったりする。
・分付、任注 交代、委託。
・三更、午後 十時午前二時の間。

衰病相牽似拔茅
[8] 八十誰能料此身
忘前失後少精神
門前偕問非時鬼
夢裏相逢是故人
[9] 九十殘年實可悲
欲將言語淚先垂
三魂六魄今何在
霹靂頭邊耳不知
[10] 百歲歸原起不來
暮風騷屑石松哀
人生不外非虛計
萬古空留一土堆

衰病相牽み茅を拔くに似たり。
八十誰か能く此の身を料らん、
前を忘れ後を失ひ精神少ゆ。
門前偕問す非時の鬼、
夢裏相逢ふ是れ故人。
九十殘年實に悲む可し、
將に言語せんとするに淚先づ垂る。
三魂六魄今何くに在りや、
頭邊に霹靂するも耳知らず。
百歲原に歸し起ちて來らず、
暮風騷屑石松哀れなり。
人生外ならず虛計に非ずや、
萬古空しく留る一土堆。

老病進み治すひまなし。
八十歲 身のふりわからず、
前後不覺のばけごころ。
門前死せる故人の噂、
夢に見るあの世の友。
九十歲悲しき餘命、
ことばの先に涙垂る。
わが魂はいずくに在りや、
雷鳴どろくも聞えず。
百歲死して起き上らず、
夕の墓の石松に渡る涼風哀し。
人生はまことに夢まぼろし、
古來空しく留る土まんじゅう。

。拔茅 ちがやはいとら拔いても生える。
。非時、任注 非命。
。三魂六魄、人の心にある三箇のたましいと身體に宿す六つのたましい。
。騷屑、風の涼しく吹くさま。

[補注] 校異は解釋に必要なものに限定。
[1] 。香風 甲本(S)花香、蓮の花の香り、十歲の男兒にたとえる。。父娘 娘字甲本(S)、丙本孃、娘と通用字、母の意。爺孃ともいい、父母の意。。趁伴 つれだってさまよう意。。毬子 まりの意。蹴鞠をいう。
[2] 。玉珪 瑞玉、きれいに清んだ美玉。成人した若者にたとえる。。脚下泥 足下の泥、とるに足らぬものにたとえ。
[3] 。六藝 士大夫の教養 士大夫の教養としての六種の技藝、禮樂射御書數。易、書、詩、春秋禮樂の六經とも。。美少年 立派な若者。杜甫の「飲中八仙歌」の「宗之瀟灑美少年、舉觴白眼望青天」

皎如玉樹臨風前の宗之は飲中八仙の一人であるが、今言う少年とは異る。老年に對して青年男子の稱（漢語大詞典②1649）少年引韓非子、内儲說上他）杜詩の白眼は世俗を冷かに見ること。誇高い青年の宗之をいう。

[4]。解到　解道＝知道　理解する意。。沒有を甲、丙本未由とするのは音聲上の通用。

[8]。借問　たずねあう。。非時鬼　天命を全うすることのできなかった死人。若死をした故人。

[10]。歸原　死亡をいう。歸源、歸元。この世の迷いの世界を脱出して眞實の本元に歸る意。

この「丈夫百歳篇」は金岡照光『敦煌の文学』[注27]に名譯がある。譯するに當り參照したが、必ずしも同調しない所もあり、併せ參照されたい。先に引用した『新五代史』の存勗が宴會に際して伶人に歌わせた『百年歌』もこのような内容のものであろう。

百歳篇　女人

甲、斯(S)二九四七、乙、斯(S)五五四九、丙、伯(P)三八二一、丁、伯(P)三一六八、

[1]
一十花枝兩斯兼
優柔婀娜復壓纖
父孃憐似瑤臺月
尋常不許出朱簾

一十花枝、兩ながら斯に兼ぬ、
優柔婀娜復た壓纖たり。
父孃憐むこと瑤臺の月に似て、
尋常朱簾を出づるを許さず。

。花枝、美しい顔と肢體。
。孃、丙本による。
。瑤臺月、玉のうてなにかかる名月。仙居の月と。

[2]
二十笄年花蕊春
父孃娉許事功勲
香車暮逐隨夫壻

二十笄年すり花蕊の春、
父孃の娉許は事功勲による。
香車暮に逐ひ夫壻に隨ひ、

二十歳、容色兼ね備う、
おっとりみめよくかよわし。
父母憐しむこと瑤臺の月のよう、
ひごろ朱簾の部屋を出きれず。
二十歳、髮上げ花の春、
父母の姑婚の許しは婿のてがら。
香車暮に婿の後を追い、

。笄年、こうがいをつける年、成人。
。娉許、結婚の許可。
。香車、婦人の車。
。壻、婿に同じ。

如同蕭史曉從雲

[3]
三十朱顏美少年
紗窗攬鏡整花鈿
牡丹時節邀歌伴
擢棹乘船採碧蓮

[4]
四十當家主計深
三男五女惱人心
秦箏不理貪機織
祇恐陽烏昏復沉

[5]
五十連夫怕被嫌
強相迎接事麼孃
尋思二八多輕薄
不愁姑嫂阿家嚴

[6]
六十面皺髮如絲
行步龍鍾少語詞
愁兒未得婚新婦
憂女隨夫別異居

[7]
七十衰羸爭奈何

蕭史と同じく曉に雲に從ふが如。

三十朱顏の美少年、
紗窗鏡を攬り花鈿を整ふ。
牡丹の時節歌伴を邀へ
棹を擢して船に乘り碧蓮を採る。
四十當家の主計ひ深く、
三男五女人心を惱ます。
秦箏理はず機織を貪り、
祇に恐る陽烏の昏れ沉むを。
五十夫に連れ嫌は被るを怕れ
強ひて相迎接し麼孃に事ふ。
尋ね思ふ二八輕薄多く、
姑嫂阿家の嚴しさを愁へず。
六十面皺み髮絲の如し、
行步龍鍾し語詞少し。
愁兒未だ新婦を婚るを得ず、
憂女夫に隨ひて別に居を異にす。
七十衰羸爭ぞ奈何んぜん

蕭史を追い曉雲と共に去った弄玉のように。
三十歲 紅顏の女盛り、
紗の窓に鏡とり花鈿を整える。
牡丹の時の花見歌、
船に棹して蓮の花採り。
四十歲當家主婦の深い心ぐばり、
三男五女は我が心を惱ます。
箏に身入れず機織なまけ、
日暮れ沈むを惜しむばかり。
五十歲 夫に嫌われるをいやがり
若くてほっそり美人を迎えてちやほや。
ふり返れば十六の娘盛りのあさはか、
しゅうとめあによめの手嚴しさ苦にもせず。
六十歲 皺增え髮は絲のよう、
歩行もぼつぼつあまり口きかず。
どら息子妻をめとらず
嫁いだ娘は別居中。
七十歲 年の衰えどうにもならず、

・蕭史、列仙傳に見える故事。蕭求「蕭史鳳臺」
・朱顏、赤味を帶びた美しい頬の美女。
・紗はうす絹。
・採碧蓮、樂府詩集「採蓮曲」（巻五十七）
・陽烏は太陽。
・阿家、婦が夫の母を呼ぶ語。姑嫂は姑舅の誤りか。

縱饒聞法豈能多
明晨若有微風至
筋骨相牽似打羅

[8] 八十眼暗耳偏聾
出門喚北卻呼東
夢中常見親情鬼
勸妾歸來逐逝風

縱饒法を聞くとも豈能く多とせん。
明晨に若し微風の至る有らば、
筋骨相牽いて羅を打つに似たり。
八十眼暗く耳偏に聾ふ
門を出で北を喚べば卻って東を呼ぶ。
夢中に常に親を見て情は鬼なり、
妾に歸り來るを勸め逐へば風のごとく逝かんとす。

佛の法を聞いてもありがたくもなし。明朝そよ風でも吹いて來たら、筋骨引きあいどらを打つようにガヤガヤ。八十歳眼くらみ耳しい、門を出て北も東もわきまえず。夢に亡親を見て心は死人、家人は妾が魂を呼びもどそうとすれば風のように死の世界に行こうとする。

。縱饒、縱令に同じ。

[9] 九十餘光似電流
人間萬事一時休
寂然臥枕高牀上
殘葉彫零待暮春

九十餘光電の流るるに似て、
人間萬事一時休す
寂然として枕に臥す高牀の上、
殘葉零を彫み暮秋を待つのみ。

九十歳餘命は稲妻に似て、
この世の營みも萬事休す。
寂かに寢臺の枕に臥せ、
殘葉の零落する暮秋を待つばかり。

[10] 百歲山崖風似頹
如今身化作塵埃
四時祭拜兒孫在
明月長年照土堆

百歳山崖の風頽すに似たり、
如今身化して塵埃と作る。
四時祭拜して兒孫在り、
明月長年土堆を照らす。

百歳嵐が物を打ごとに似て、
ただ今一身化してちりとなる。
四季の御魂祭に子や孫集い、
明月長く土まんじゅうを照す。

〔補注〕

[1] 麼孅　甲本孅孅は細くか弱い。。父娘　娘丙本孃、父母を父(爺)孃という。丈夫篇[1]補注参照。

[2] 。花蕊　花のしべ。二十歳の女性の華やかさを花蕊にたとえる。。蕭史…從雲　出典は『列仙傳』吹蕭(簫)の名人

蕭史が秦の穆公の娘弄玉を妻とし、簫を教えて鳳の鳴き聲を模した。鳳凰が聲に誘われて來たので鳳臺を作り、夫婦は臺上に止り下りなかった。數年して夫婦は鳳凰に從って飛び去った。雲に從ったと詩中にあるのは雲に乘って昇仙したことを意味する。傳には從雲の語は見えない。

[3]。朱顏　諸本 珠顏(丁)、珠顏(丙)。採碧蓮　碧蓮（本墨蓮(丁)。ぬどりがかった色の蓮。古くは梁武帝詩（『佩文韻府』十六上碧蓮）に見える。唐李綽『尚書故實』「宣平大傅相國盧公應舉時（中略）嘗遊芍陂見里人負薪者、持碧蓮花（來）」（叢新編283頁）

[4]。秦箏　秦の人の奏する箏、この箏を奏することは男子の教養であった。晉傅玄『箏賦』に「上圓象天、下平象地、中空準六合、絃柱擬十二月、斯乃仁智之器」（『初學記』十六箏。六合は天地四方、天下をいう）。機織　機を織ることは女人の仕事として最も重要なこと。秦箏整わず機織に身が入らぬことは男女の勤めるべき素行治まらず、母親の悩みとするところ。○陽烏　『藝文類聚』一、日「廣雅曰、日名朱明、一名耀靈（中略）亦名陽烏。淮南子曰、堯時十日並出、草木燋枯。堯命羿仰射十日中其九。烏皆死、墮羽翼」（烏を太陽の精と考えた。黑點を烏と見立てた。類文『淮南子』本經訓）

[5]。輕薄　德薄くかるがるしいさま。『樂府詩集』六十七、雜曲歌辭、輕薄篇　晉、張華「樂府解題曰、輕薄篇言乘肥馬、衣輕裘、馳逐經過爲樂、與少年行同意。何遜云、城東美少年、張華見云、洛陽美少年、是也。末世多輕薄、驕奢好浮華、志意能（作既）放逸、資財亦豐奢。被服極纖麗、肴膳盡珍嘉。（以下略）」

[6]。龍鍾　諸本 隴蹤。よろめき歩くさま。

[7]。縱饒　縱令、縱然とも。饒字（然甲本注）、繞(丙)。たとい、もしの意。

[8]。喚北…呼東　北に向って呼んだつもりが東を呼んでいる。方向をわきまえぬほど惚けていること。○勸妾云々　意識が朦朧として生死の境を往來しているさま。『楚辭』に宋玉の招魂の後漢王逸注に「招者、召也。以手招以言曰召。

魂者身之精也。宋玉摽哀屈原忠而斥棄、愁憂鬱作山澤、魂魄放佚、厥命將落、故作招魂、欲以復其精神、延其年壽云々」（『楚辭章句』巻九）とあり。

今回は陸機「百年歌」及敦煌本「夫人百歲篇」「女人百歲篇」に限定して讀解した。次回は「歎百歲詩」（龍上苗）、「百歲篇（池上荷）、「百歲篇（一生身）、「百歲篇 緇門」（以上『敦煌歌辭總編』）を讀解する預定。

劉復「女人百歲篇」（敦煌掇瑣）1925 中央研究院歴史語言研究所專刊より

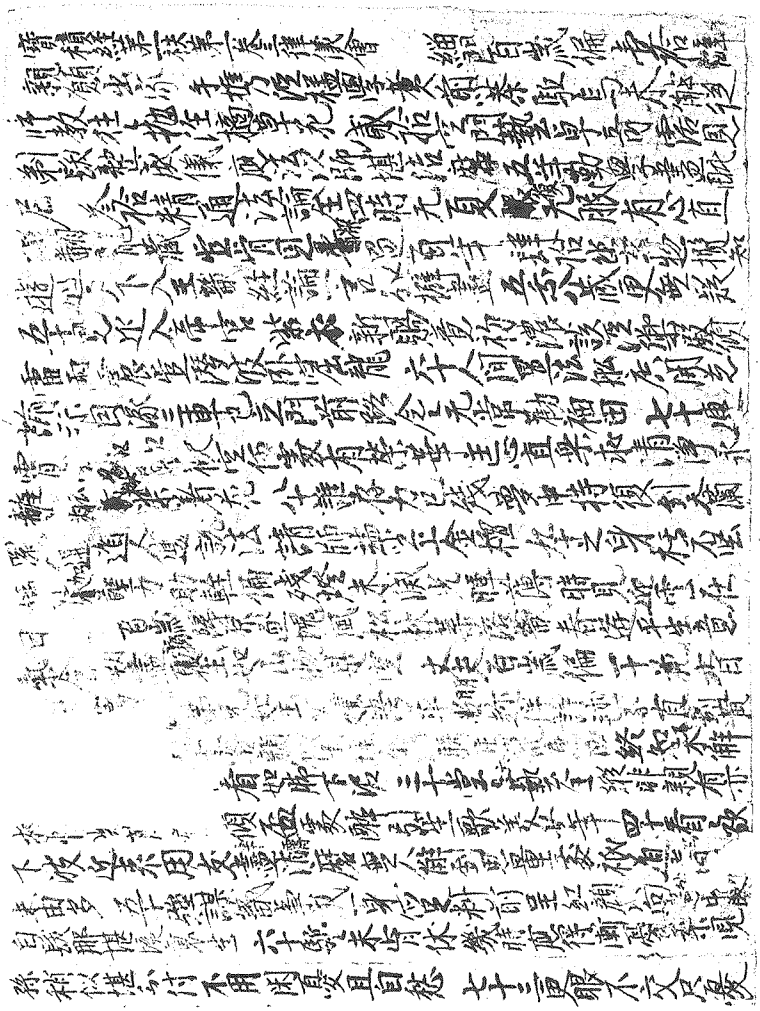
頁一一一　三一六八

女人百歲篇　從壹拾至百年

壹拾花枝雨斯兼優采課鄰復髮髮父纔怜似樊壹月尋
常不許出珠簾
貳拾笄年花蕊春父纔執計事功勳管車暮逐隨夫燭如
同鸞事覽從雲
叁拾珠頰美小年紗隱覆鏡口花錢牡丹時節愛河落撥
煙乘私採壁連
肆拾當家主計深三男五女惱人心秦箏不理貪機織祇
恐鳴烏昏復沉
伍拾連夫怕被嫌强相迎接事娶殲尋思一人多輕薄不
悉嫂姑阿嫁嚴
陸拾面皺髮如絲行步躍踵少語詞愁如未得温新婦優

頁一一一
頁一一一　三一九

女隨夫別與居
柒拾衰羸爭鄰何綴饒聞法豈能多明鳳若有微風至翩
骨相連似打羅
捌拾眼暗耳偏聾出門嘆北刦來東夢中長見親情鬼勸
妾歸來逐逝風
玖拾雷光似電流人間万事一時休寂然卧枕高床上殘
葉彫零待暮秋
百歲山崖風似頹知今身化作塵埃四時祭拜兒孫親明
月長年照土堤



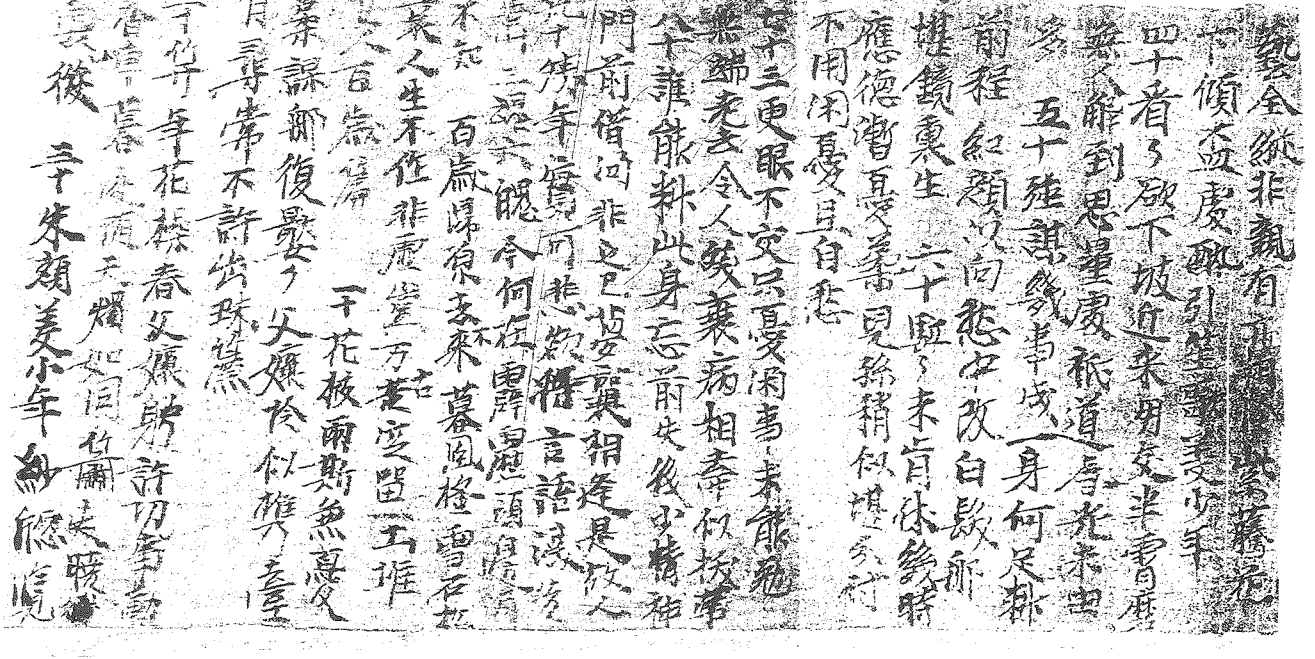
百歳篇〔緇門百歳篇、丈夫百歳篇、女人百歳篇〕 S. 2947 /1

『英藏敦煌文獻』(四川人民出版社 1991年)による

孫稍似堪分付不用閑憂且自愁　七十三更服不交只憂
閑事未能抱經端老去令人笑衰病相牽似拔芋
八十誰能料此身之前失後小精神
夢裏相逢是故人　殘年
岳三魂六魄今何在霹靂
來暮風撞屑石松裏
人白歲偏　千花枝兩
春嬢嬢能許助功勳春車暮逐隨風盪如同蘭麝
晚從雲　三年未顯美小生紗帽
要訴僻撥棹乘船茉莉
夏州人
晉復流
隨夫
七十
親情鬼
人間多事時休
如今已作化塵埃四時祭拜見孫在明月長年照玉堆

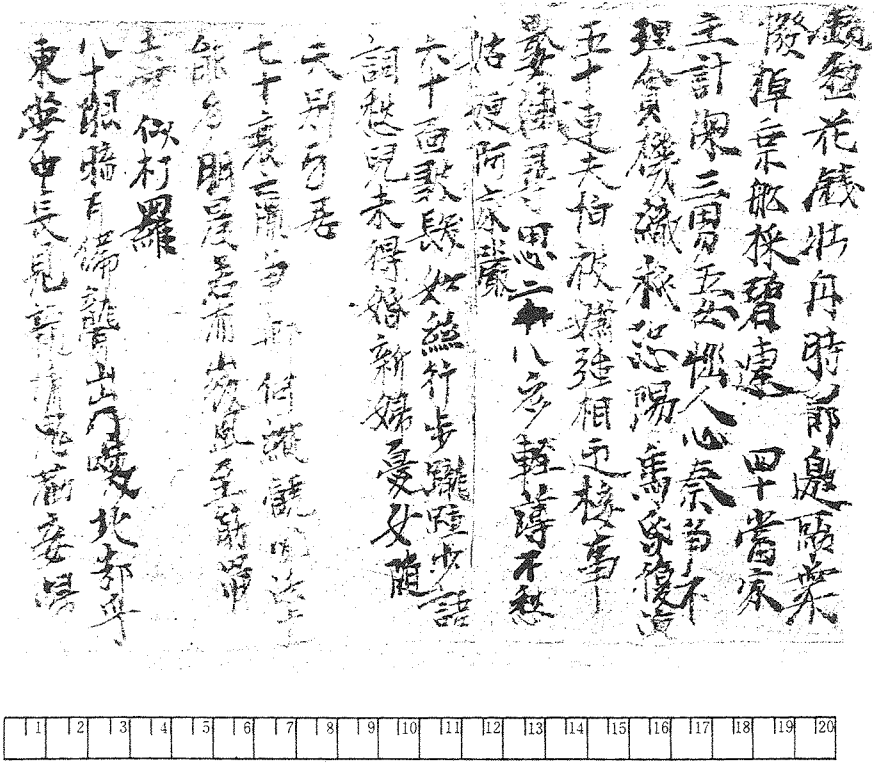
『英藏敦煌文獻』による

百歳篇一巻　　S. 5549/1



S. 5549/2

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20



S. 5549/3

鄭振鐸『中國俗文學史』上（一九三八年）より

敦煌掇瑣裏，又有女人百歲篇，其結構也和『五更轉』『十二時』極爲相同，從壹拾年到百年，歌詠『女人』的一生。這可見在當時，這樣幼稚的結構，在民間裏是很流行的。其中充滿了悲感的氣分，卻不是什麼宗教的勸道歌。

女人百歲篇，從壹拾至百年。

壹拾花枝剛斫兼，優柔課鄙復髮髮。父邊恰似增壹月，每常不許出珠簾。
貳拾年花蕊春，父邊將許事功勳。香車暮逐隨夫壩，如同羅史曉從雲。
叁拾珠顏美小年，紗總擅鏡□花鈿。牡丹時節遊謝諸，撥棹樂松採蓮。
肆拾當家主計深，三男五女惱人心。秦箏不理貪機織，祇盈鴛鴦昏昏復沉。

〔注〕

1 國際音聲字母（萬國音標文字）中古（唐）音 藤堂明保編『学研漢和大字典』による。

2 『禮記集說』巻一曲禮上 36（『學術名著』世界書局）所收

3 『樂府古題要解』下 44中 百年詩 44中（『學津討原』『叢書集成新編』81）所收。入矢義高「徵心行路難 ―定格聯章の歌曲について―」（『塚本博士頌壽記念 佛教史學論集』1961）に『古今樂錄』『教坊記』『雜錄』とともに所引。

4 『教坊記』『雜錄』巻 （『說郛』巻四十五 8 ＝上海古籍出版社）所收。撰者を唐 王鼎 瑯琊 とするが鼎は徽が正しい。八三一年前后在世

5 『通志』巻四十九 樂略第一 人生四曲（十通『通志』633上 ⑭ ＝臺灣商務印書館）

6 「百年歌」 陸機（吳 永安四年（二六一）―晉 太安二年（三〇三））の底本として 郝立權撰注（權注と略す）『陸士衡詩注』巻二 38～41 を用いる。世界書局所收。參考に影印した宋本『藝文類聚』所收のものは現存本文としては古い部類に屬す。

7 清酒云々の句を除き各句同じ韻、類似韻を押韻している。八十時上聲紙韻を押韻し、百歲特に至ってやや亂れている。このような押韻方法をどう說明するのか知らない。乞教示。

8 『古注十三經』（相臺岳氏本・永懷堂本＝新興書局）

9 『敦煌曲初探』（上海文藝聯合出版社 一九五四年十一月）。任二北が敦煌曲を分類採集したもの。後『敦煌曲校錄』（上海出版圖書公司 一九五五年五月）に集成。

10 「定格聯章」 任二北氏の用語。敦煌曲を「普通雜曲」「定格聯章」と「大曲」に三分類。「定格聯章」類には「五更轉」「十二時」「十恩德」「百歲篇」「失調名」（十二月想思十二首）を收める。この曲調は

一定の句格を持っていることからの命名。注3、9参照。

11 「敦煌本歎百歳詩、九想觀詩と日本文學について」『内野博士還暦記念東洋学論集』（漢魏文化研究会 一九六四年十二月）所收。

12 注3参照。また、「敦煌定格聯章曲子補録」（「東方學報 京都 第三十五冊 一九六四年三月）参照。

13 『高僧傳十三唱導』（『大正新修大藏經』二〇五九 417下 ⑤⑩）所收。

14 『日本佛教文學研究 第一集』第二編「唱導文學史稿 二 中国に於ける唱導」（豊島書房 一九六六年十月改訂版）参照。

15 『杜陽雜編』下（『學津討原』叢書集成新編 156下27 ㉘）蘇鶚、唐の光啓（八八五～八八八年）の進士。『全唐文』巻八二三 参照。

16 『舊唐書』（1467/10 ⑭）標點本＝中華書局）参照。

17 『唐書』（5351/11 ⑰）標點本）参照。川口久雄論文引之 注11論文。

18 『新五代史』（41/3 ）の標點本。『舊五代史』二十七 唐書三、莊宗（存勗）紀一 369/12 ③）標點本）参照。舊新兩五代史ほぼ同文。川口久雄論文 注11参照。

19 『敦煌歌辭總編』上、中、下（上海古籍出版社 一九八七年十二月）。敦煌曲を分類し、校異、注解、解題を加え、この種の本では最も詳細な内容を持つ。巻一 雜曲 雲謠集雜曲子、巻二 雜曲 曼曲、巻三 雜曲 普通聯章、巻四 雜曲 重句聯章、巻五 雜曲 定格聯章（含百歳篇六點）、巻六 雜曲 長篇定格聯章、巻七 大曲、補遺（三 曼曲類、（三）組曲類、（三）五七言體 等。参考文獻、敦煌歌辭研究年表 等所收。

20 ペリオ（P）、スタイン（S）の影印本 東洋文庫には兩影印敦煌本（寫眞版）が存す。ペリオ本

は『法藏敦煌西域文獻』①2001～2031、②2032～2039、③2040～2058 上海古籍出版社 一九九五年十二月①、一九九四年十二月②③續刊中）、スタイン本は『英藏敦煌文獻』（漢文佛經以外部份）⑦～⑩ 10～6307 四川人民出版社 一九九〇年九月～一九九四年九月續刊中）。この他『敦煌寶藏』（新文豊出版公司 140冊）があるが、印刷不鮮明な部分がかなり存す。

21 『敦煌の文学』（155～156 大蔵選書 大蔵出版 一九七一年六月）

◎敦煌曲には俗語が多く見られる。注19の總編には注解が施されているが次に示す二書は參考になる。

。蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』（上海古籍出版社 一九五九年三月初版〈中華書局〉一九八一年四新版、一九八八年二版〈第四次增訂本〉）

。蔣禮鴻主編『敦煌文獻語言詞典』（杭州大學出版社 一九九四年九月）

◎敦煌曲の佛教關係の作品に言及した次の書がある。百歳篇(193頁)にも言及されている。

。加地哲定『增補中國佛教文學研究』第六章 唐代民間歌謡における佛教文學（同朋社 一九七九年十月）